



近江の古瓦 I 総説

はじめに

仏教がわが国に伝来したのは6世紀の始めごろと思われるが、寺院の建立に関する具体的な姿がわかるのは、日本書紀の崇峻天皇元年(588)の記事のようです。ここでは、百濟から仏舎利や僧侶と共に寺工・鑪盤博士・瓦博士・畫工等が来朝したことが述べられています。このように、仏教は新しい思想・学問をわが国にもたらしただけでなく、寺院の建立を通してさまざまな文化を伝えたことがわかります。特に建築では瓦葺のものがあらわれ、これまでの建築様式とは全然異った堂々とした建造物が日本人の目にふれるようになりました。しかし、このような瓦葺の建築様式も、最初のうちは寺院に限られていたようで、宮殿が瓦葺になるのは、現在わかっているところでは、持統天皇の藤原宮からです。これは、日本書紀にある斉明天皇元年(655)の小墾田宮を瓦葺にしようとして果さなかった記事や、扶桑略記の持統天皇11年(697)の記事に、天皇の代に始めて官舎に瓦を葺いたとあるのとも合致するようです。

屋根を瓦で葺くとなるとその重量も相当なものとなり、従来のような掘立柱式のもので

は、その重さに耐えられなくなります。従ってしっかりした基壇を築き、その上に礎石を置いて太い柱を立て、それによって重い屋根を支えることとなります。その結果、古代の寺院は、たとえその建物は滅びても、基壇や礎石が残ったり、屋根の瓦が崩れ落ちたまま土に埋まって今日まで残っていることが多いのです。また、礎石が他に転用されて無くなっていても、礎石を据えるための掘り方や根固めの地業がそのままであって、それによって礎石のあった姿を推測することも可能です。

以上述べたように、古代寺院が瓦葺建造物で中心伽藍を形成しているため、その遺構の調査には瓦が重要な手掛りとなります。そのうえ、軒先を飾る瓦には、丸瓦にも平瓦にも文様を持つのがほとんどで、しかもその文様は文化の系統や時代によっていろいろと差異を示すものです。従って、このような瓦の研究が古代寺院の研究に欠くことのできない要素となるのです。さらに瓦の文様だけでなく、その作り方やそれを焼いた窯跡の調査も進み、ますます重要性を増してきました。以下に、近江の遺構・遺物によりこれらを具体的に示すとともに、各地出土の古瓦の実際を述べることにします。

瓦 窯

瓦には当然それを焼いた窯があります。従って出土遺瓦については、瓦そのものの研究とともに、それがどこでどのようにして焼かれたかを調べることも必要です。窯にはふつう登り窯と平窯の2種があります。最近県内でも瓦窯が発見調査されていますが、まだ充分とは言えません。そのうちで比較的よく調査されたのが、南滋賀町廃寺の瓦を焼いたと



瀬田堂ノ上遺跡 瓦溜



樽木原瓦窯

と思われる樽木原瓦窯(大津市南志賀町)です。これは調査されたのが1基だけで、他は今後の調査にまたねばなりません。階段状に作られた登り窯で、地形の斜面を利用して作られています。付近には工場ではないかと思われる遺構も発見されました。この窯で焼いた瓦は、有名な方形瓦や複弁蓮華文の軒丸瓦、重弧文の軒平瓦、飛雲文の軒丸・軒平瓦、そのほか鶏尾や鬼瓦などですが、これらは総て南志賀町廃寺から出るもので、窯の位置から見ても、この寺の瓦を焼いた窯であることは明らかです。また衣川廃寺(大津市堅田衣川町)では寺院遺構に接して瓦窯が見つかりました。寺院の瓦をその寺院の境内近くで焼く

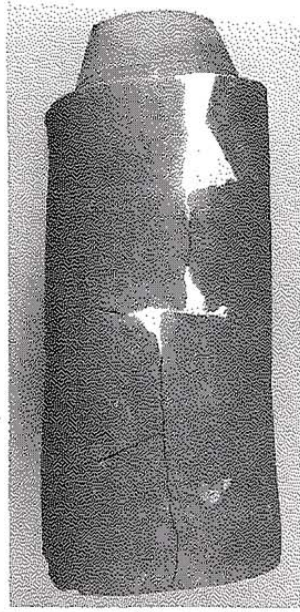
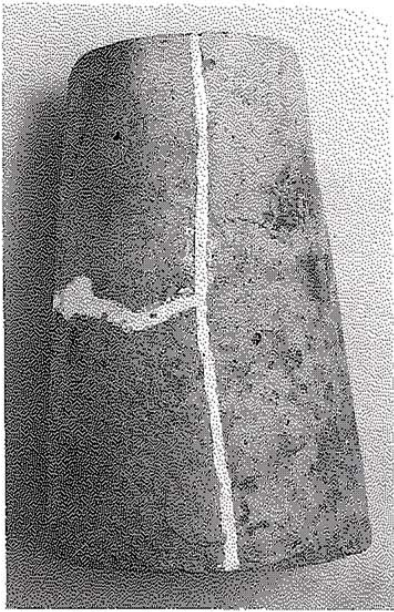
ことはよくありますが、衣川廃寺の場合には伽藍遺構に非常に近くて、異様に感じられるぐらいです。これも登り窯形式の瓦窯です。そのほか、浅井町木尾に八島廃寺の瓦を焼いたのではないかとと思われる登り窯があります。さらに大津市穴太の廃寺跡と思われる遺跡の東のはずれや、崇福寺跡へ登る途中の山麓に近い山林中に瓦窯と思われる遺構が発見されました。二つとも充分にその姿を明らかにすることはできませんが、共に平窯形式のものようです。大津市南部の南郷や田上に、近江国衙や付近の寺院の瓦を焼いたと思われる窯がありますが、これも残念ながらその詳細は不明です。

瓦の製作

古代の造瓦法にはふつう桶巻作りと一枚作りの二つの方法がありますが、県内出土の古瓦にもその両方があるようです。桶巻作りは、細板を桶状に連ね、それに粘土板をはって形を作り、4分して平瓦4枚を作る方法(3分する場合もある)です。一枚作りは木型を使って文字どおり1枚ずつ平瓦を作る方法です。この木型と粘土の間に布をおいて離れ易くするため瓦に布目があらわれたり、焼くときの破損を防ぐ目的で粘土中の空気を押し出す道具としての叩き板に、格子目を刻んだり縄を巻きつけたりしたため、瓦にいろいろな叩き文が残されているのです。丸瓦には、上端が下端よりやや細くなる行基葺丸瓦と、上端部に玉縁を作る玉縁付丸瓦があります。このような一般的な瓦のほかに、南志賀町廃寺で出土する瓦には、方形の軒先瓦や弧を作らない



叩き文(左と中、南志賀出土 右、野洲出土)



行基葺丸瓦（穴太廃寺出土） 玉縁付丸瓦（堂ノ上遺跡出土） 平瓦凹面の布目と文字（堂ノ上遺跡出土）

素文の軒平瓦、それにともなう筒瓦や平瓦、軒先の文様面が円形でありながら筒部が方形になる瓦、軒丸瓦の裏面に絞りの布圧痕のあるものなど、特殊な作り方の瓦があります。

瓦の中にはまれに文字が書かれているのがあります。この文字には、使用した建物名、焼いた窯の名、人名などいろいろなものがありますが、県下では、瀬田の国衙と惣山遺跡の瓦の中に「修」の字を刻したものがあり、同じ瀬田の堂ノ上遺跡で製作年月を現わすと思われる「承和十一年六月」(844)と刻したものがあります。

さらに、このような瓦の文様を型でおして作る場合の型について注意すべきものがあります。それは大津市の旧国昌寺出土の瓦の中に、奈良の藤原宮の瓦の型と同じものを使用して作られたものがあることです。このことは、国昌寺のこの種の瓦の製作について三つ

の場合が考えられます。この瓦が藤原宮で作られてここまで運ばれたか、藤原宮の瓦の関係者が型を持って出張して瓦を作ったか、型だけが国昌寺の瓦製作者に貸し与えられたかの三つです。現在では、そのいずれであるかを決定することはできませんが、第一のケースは可能性が薄く、第二、第三のいずれかと考えるべきではないでしょうか。

瓦の種々相

瓦はふつう屋根を葺くためのもので、平瓦と丸瓦からできています。現在ではこの両方が一枚になって波形になっている棧瓦がほとんどですが、もとはこの二つは別々に作られていました。そして、軒先の瓦にはいろいろな文様がつけられ、この文様が文化の系統や時代を知る大切な手掛りになったことは前述のとおりです。しかし、瓦にはこの外にもいろいろな用途に応じたものが作られており、



同じ型で作られた瓦（左、国昌寺出土 右、藤原宮出土 右は奈良国立文化財研究所提供）

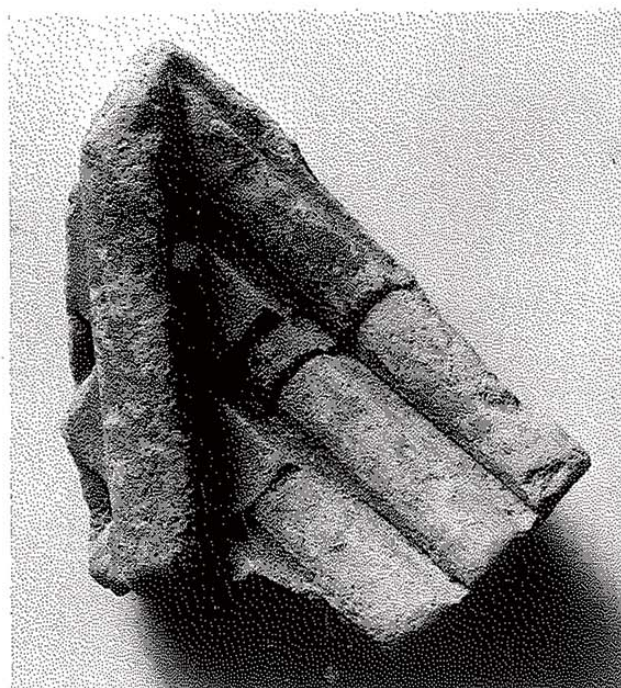
特に棟の端を飾る鷲尾や鬼瓦などは時代を知る大切なものです。

また、瓦の中には基壇の端を整えるために使われているものもあります。いわゆる瓦積基壇とよばれるものがこれです。ふつう基壇は石で形を整えるのですが、瓦を積み重ねて土をとめた場合もありました。県内では、古くは崇福寺や南滋賀町廃寺で見られ、近江国衙や桑畑廃寺(奈良時代の近江国分寺か)などでも見られます。また、まれには礎石を据える根固めに瓦を利用している場合もあります。

なお、瓦ではありませんが、瓦と同じように粘土を焼いて作られた塼や塼仏もあります。塼は現在の煉瓦やタイルのようなもので、比較的厚く作り床に敷きつめたものです。これは南滋賀や錦織、国衙跡など各地で出ています。塼仏は薄い粘土板に仏像を陽刻したもので、おそらく堂の壁面にタイルのように張られたものでしょう。塼仏は崇福寺跡、新旭の大宝寺跡、蒲生の石塔寺、田上の岩窟廃寺の4カ所が出ています。そのほか、瓦で作られた塔のミニチュア——瓦塔もあります。県内では堅田の衣川廃寺と彦根市の普光寺跡から出ています。

おわりに

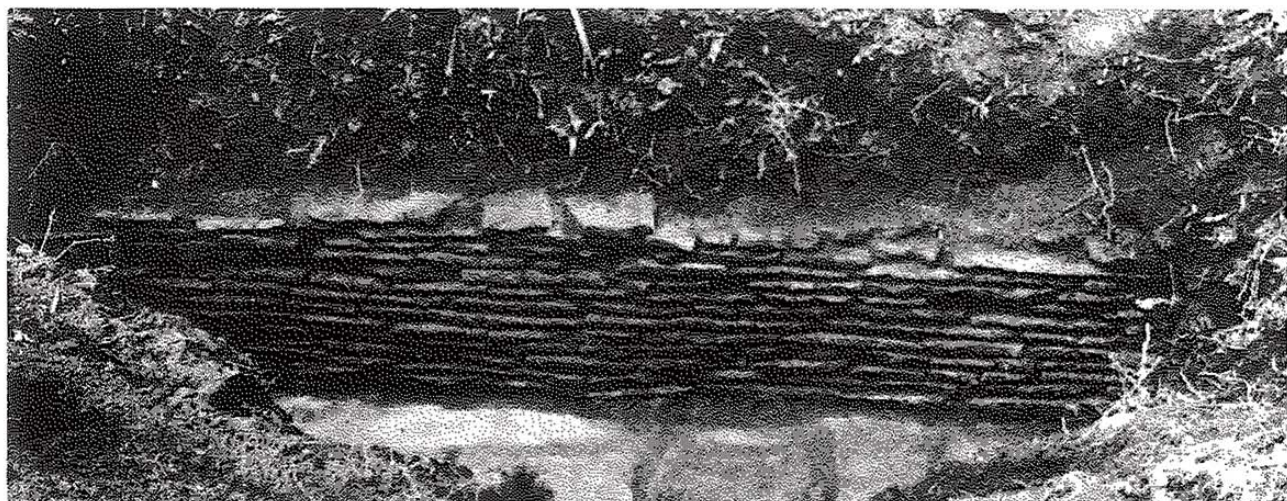
以上、瓦についてその総括的なことを述べましたが、引き続き瓦の中心とも言うべき軒先の文様のある瓦について、地域別に県内を



瓦塔破片(衣川廃寺出土)

一巡することにします。ただし、この「近江の古瓦」では主として平安時代以前の古瓦について述べることにし、安土城跡出土の金箔瓦に見られるような中・近世の瓦は別の機会にゆずりたいと思います。なお県内では、平安時代ごろからの瓦の出土がめっきり少なくなりますが、これは恐らく寺院の建築に、瓦葺に代って檜皮葺などを採用することが多くなったからではないかと思われます。

(西田 弘氏提供)



瓦積基壇(南滋賀町廃寺塔跡)